

Omusubi Rolling Down

Long, long ago there lived a good old man and his wife in a village. They were nice and honest, and worked hard, so people called them Good Old Couple. One day, as usual, the old man went to a hill to gather firewood. He carried a big rice ball that his wife made. (An omusubi in Japanese)



After working hard all morning, he felt hungry. After work was his favorite time to eat a rice ball. He sat on a stump near by and grabbed the big rice ball to eat. When he was about to eat, the rice ball slipped out of his hands, and fell down to the ground. Look! It started rolling down along the slope.

"Wait a bit, wait a bit, my rice ball. It's the rice ball my wife made," crying, the old man was running after it. But it kept rolling down so fast that he couldn't catch it. Then it fell into a big hole at the end of the slope.

"Oh, I've never noticed there's such a big hole here," he said. He looked down into the hole. Just then a song came out of it.

"Rice ball rolling down. Rolling, rolling down." The song was so pleasant and beautiful that he leaned over the edge of the hole to listen to it better. He stuck his ear to the hole, and tried to listen attentively. But the music was over. He stuck his head deeper into the hole, and---he himself slipped down into it. This time the song he heard was like this.

"Old man rolling down. Rolling, rolling down."

He looked around. The place he was sitting was surely the bottom of the hole. But it looked like a big hall. And can you believe this? There were lots of mice working there. One of white mice came near him, and said,

"Welcome to our place, Old man. Thank you so much for giving us that big rice ball. Maybe your wife made it. We all are glad to have it. We'll serve you lunch in return."

All the mice were working happily. Singing a song, they were making rice cakes. (Rice cakes are called mochi, and are essential for happy occasions in Japan.)

Their working song was like this,

"If there's no cat, our place will be peaceful. We love peace in the world of mice. Yo-ho, yo-ho-ho."

Before long, just-made rice cakes and some food were served in front of him.

The moment he bit a cake, he said, "This is the most delicious rice cake I've ever had in my life." And he ate all the food they served. Then the mouse brought a small but beautiful box. Handing it to him, the mouse said,

"This is for your wife. Would you tell her how we liked her rice ball? We all appreciate it."

In the meantime his wife had started worrying about her husband who was a little late in returning home. When he came back with the box, she cried with

relief. Soothing her, the man told her why he couldn't come home earlier. And opened the box he brought. Look! There were some coins and jewelry in the box. It must be a mouse-treasure box.

○ネズミにもらった箱の中には何が入っていたでしょう。

おむすびころり

むかし、むかし、ある所におじいさんとおばあさんが住んでいました。二人はとても親切で正直で、働き者でしたので、みんなから「仲のいい二人」と呼ばれていました。

ある日のことです。いつものようにおじいさんは、おばあさんがつくってくれた大きなおむすびを持って、山へたきぎを取りに出かけました。午前中ずっと働いて、おじいさんはお腹がぺこぺこで



す。仕事のあと、おむすびを食べるのがおじいさんの一番の楽しみでした。近くの切り株に腰掛けると、おむすびを取り出しました。ところが、食べようとした時、おむすびは、おじいさんの手からすべり落ち、地面に落ちてしまいました。すると、おむすびは坂を転がり始めました。

「ちょっと待ってくれ、ちょっと待ってくれ、おむすびさん。おばあさんがつくってくれたおむすびさん。」と大きな声をあげながら、おじいさんはおむすびを追いかけました。でもおむすびはいきおいよく転がって行き、おじいさんにはとても追いつけません。やがておむすびは坂の下の大きな穴に入ってしまった。

「あれまあ、こんな大きな穴がここにあるとは知らなかったな。」とおじいさんは言うと、穴の中をのぞいて見ました。すると歌が穴から聞こえてきました。

「おむすびころり、ころり、ころり。」とても楽しそうできれいな歌声だったので、おじいさんはもっとよく聴こうと穴の中に体をかがめました。穴の中に耳を傾け、もっとよく聴こうとしました。でも歌は終わってしまいました。さらに頭を穴の中に入れると、おじいさんは穴の中にすべり落ちてしまいました。すると、こんな歌が聞こえてきました。

「おじいさんころり、ころり、ころり。」

おじいさんはあたりを見回しました。おじいさんが座っているところは確かに穴の底でした。でもそこは大きな広間のように見えました。驚いたことに、沢山のねずみがそこで働いていました。一匹の白ねずみがおじいさんの所へ近づいて来て、こう言いました。

「ようこそねずみの里へ、おじいさん。大きなおむすびありがとうございました。おばあさんが作ってくれたのでしょうか。ねずみ一同大変喜んでます。お返しにお昼を召し上がってください。」ねずみはみんな楽しそうに働いています。唄を歌いながらおもちをついています。

「ねこがいなけりゃ静かだな、ここはいいとこ、ねずみの国さ。ソレつけ、ヤレつけ、どっこいしよ。」

やがて、つきたてのおもちと料理がおじいさんの所に運ばれてきました。

おもちを一口食べて、おじいさんは「こんなおいしいおもちは初めてじゃ。」と言いました。おじいさんは出された料理は全部たいらげました。すると白ねずみが小さくてかわいい箱を持ってきました。おじいさんに手渡しながらこう言いました。

「これは、おばあさんに渡してください。とてもおいしいおむすびだったと伝えてください。みんな感謝しています。」と。

さて、おばあさんは、まだ家に帰ってこないおじいさんのことが心配でたまりませんでした。おじいさんが箱を持って帰ってきたときは、ほっとしました。おじいさんは、おばあさんを安心させると、帰りがおそくなったわけを話しました。そしてもらってきた箱を開けると、驚いたことに、お金と宝石が入っていました。それは、ねずみの宝箱だったのです。

さて、話はこれで終わりではありません。仲のいい二人のとなりに、別のおじいさんとおばあさんが住んでいました。お分かりのように、今度のふたりは親切でも正直でも、働き者でもありま

せん。ふたりは隣の家の会話を盗み聞き、自分たちも箱が欲しくなりました。

次の朝、おじいさんは、おばあさんにつくらせた大きなおむすびをもって同じ山に出かけました。そして話に聞いた大きな穴をあちこちさがしました。山のてっぺんから、坂の下まで、隅から隅まで探しました。そして、やっと見つけ出しました。

「これが、あの穴じゃな」と言うと、さっそくおむすびを穴の中に落としました。すると、まもなく歌が聞こえてきました。

「おむすびころり、ころ、ころり…」おじいさんは、にたっと笑うと、歌の最後まで聞かずに穴に滑り込みました。ドスンと穴の底にしりもちをつきました。周りを見渡すと沢山のねずみが唄を歌っておもちをついていました。

「これがあの場所だな」と思うと、しばらく唄を聴いていました。ねずみたちはおじいさんをちらっと見ただけで、忙しく働いていました。唄を歌いながら、おもちをついていました。

「ねこがいなけりゃ静かだな、ここはいいとこ、ねずみの国さ。ソレつけ、ヤレつけ、どっこいしょ。」

おじいさんは、ねこのまねをすれば、宝箱が手に入ると、考えました。そこで、「ニャーン、ニャーン」となきました。

突然、あたりが変わりました。ねずみたちは一瞬の間、凍り付いてしまいました。次の瞬間、一匹のねずみが叫びました。

「ねこだ、ねこが来た！」

別のねずみが叫びました。

「ねこを入れるな。入り口を閉めろ。」

ねずみたちは目にもとまらぬ速さで動き始めました。あたりは混乱状態でしたが、しばらくすると真っ暗になり静かになりました。

おじいさんは一人残され、暗闇でぼう然としていました。どうしたらよいのかわかりませんでした。でもここで死ぬのはまっぴらです。おじいさんは、ねずみの国から逃れようと素手で必死に上の方へ掘り始めました。

さて、おばあさんは、年老いて、杖がなくては歩けません。しかし、ねずみの宝箱の期待が大きくて、おじいさんの帰りを家で待っている気にはなりません。杖をつきながら、おばあさんは山に向かいました。山のふもとに着いた時には、疲れてもう歩けません。気持ちとは反対に、おばあさんはそこでちょっと休むことにしました。その時です。おばあさんは、目の前の地面が膨れて、動いているのを目にしました。

「畑を荒らすモグラじゃな。憎いやつ。思い知らせてやる。」

おばあさんは、杖で思いっきりそこをたたき始めました。

「やめてくれ。いたっ。いたっ！」と叫ぶと、おじいさんが地面から顔を出しました。

おばあさんは、かわいそうに、ショックでぼう然としてしまい、顔中泥だらけのいじわるじいさんを見られませんでした。その上、おじいさんの頭はこぶだらけです。

ふたりはしばらく、言葉も出ませんでした。